

高木家文書「酒銘」による京都酒造業についての考察 そのII

山下美智子 勝

今回は高木家文書「酒銘」を中心とし、その他の文書を参考にし、応永年間から元禄時代頃までの京都酒造業の変遷および酒家名等についての考察を行った⁽¹⁾。今回は高木家文書「酒銘」に記載されている酒銘、酒銘の出典及び酒造業における酒銘の発生等についての考察を試みた。

一、高木家文書における酒銘の出典

添記資料にあるように、三五四点の酒銘のほとんどは和歌に由来している。引用されている和歌の数の多いものから順にならべると、第一表にあるように『夫木和歌抄』(一三〇九～一〇)、『古今和歌集』(九〇五)、『玉葉和歌集』(一三二二)、『拾遺和歌集』(一〇〇五～七)、『続拾遺和歌集』(二二八二)、『新古今和歌集』(二二二二)、『草庵和歌集』(一三三九)、『続後撰和歌集』(二二五一)などがある。このように歌集名が明記してある酒銘が、全体の四一%以上にもなっている。これについて多いのが、宝鏡寺宮家、武者小路家、九条家等朝廷関係の公卿家御銘で、全体の二六%以上である。その次に多いのが

第一表 酒銘の出典

歌集名	由來の酒銘數
夫木集	42
古今集	24
玉葉集	8
拾遺集	6
続拾遺集	6
新古今集	5
草庵集	5
続後撰集	5
千載集	4
新拾遺集	4
新千載集	4
続千載集	4
風雅集	4
新後撰集	3

続古今集	3
類題	3
玉振集	3
新統古今集	3
その他和歌集	10
計	146 (41.2%)
公卿名等	8
宝鏡寺宮家	6
武者小路家	6
九条家	6
妙法院宮家	3
清水谷家	3
二条家	3
鷹司家	3
その他家	59
計	94 (26.6%)
歌会名等	8
宝治御百首	5
玉吟	5
堀川百首	5
千首	3
広永御会	3
六百番歌合	3

由来の酒銘数

松尾社御法楽	3
禅林宮殿七百首	3
その他歌会	33
計	68 (19.2%)
出典記載ない和歌	37 (10.5%)
和歌以外	9 (2.5%)
総計	354 (100%)

() 内は全体に対する%

「宝治御百首」、「堀川百首」、「千首」等の歌会、歌合等の和歌に由来する酒銘で、全体の約二〇%を占めている。このほか出典の記載のない和歌に由来するものが約一〇%ある。和歌以外に由来するのは九点にすぎない。

このように「元禄時代頃の京都の酒銘は、ほとんどが和歌に由来している」というのが大きな特徴である。当時の社会においては、人間の思惟、願望を端的に表わすものとして、和歌は大きな意味をもっていたと思われる。したがって一般人の憧れる和歌から酒銘を採ったということは酒家にとってごく自然の成り行きであったと考えられる。多く利用されている歌集の評価が高かったとすると、ほぼ納得できるのであるが、『夫木和歌抄』が断然一位であること、『万葉集』が二点しか引用されていないことなどはやや意外な感がある。引用されている和歌の作者を調べてみたところ、すでに有名になって評価の定まっている有名歌人が目につき、家隆、俊成、定家、為家、貫之、友則等がよく利用されている。しかし有名歌人といえども三、四首の利用が

最高で、全体としては此等の人にかたよっているということはない。又同じ歌が別の酒銘に利用されている例も二、三ある。「ときわなるまつのみどりも春くれば 今ひとしほの 色まさりけり」という歌は若松、常盤の春、みと里、松のみどりという四つの酒銘に利用されている。又、「君が代は 千世に八千世に 細石の いわをとなりて こけのむすまで」という今の国歌の本歌も細石、さざれ石の酒銘に利用されている。

引用されている和歌は一番新しいものでも文明、永祿頃で、高木家文書の元禄頃から見ると百年以上も昔のものである。応仁の乱以後、江戸時代になるまで、相つぐ戦乱のため、官廷人は落着いて和歌に集中できるような余裕もなく、社会的に認められるような有名な歌集もでなかったので、室町中期以前の社会的に定着した有名和歌が使用されたのであろう。

当時の京都の文化人である公卿、寺院等の有名人に和歌をもらい、これにもとづいて酒銘をつけたのが全体の四分の一以上もある。有名人の御推薦という宣伝は現代でもよく行われることであるが、当時においては現代以上に、もっと有力な宣伝手段であったのであろう。戦国時代以後江戸時代にかけての真の権力者は信長、秀吉、家康等に代表される戦国の諸大名であり、徳川幕府であるのにもかかわらず、これら武將の御推薦がないのも面白い。酒は文化であり、武ではないということを買っているわけである。このことは江戸時代を通じて、ずっと京都では守られていたことらしく、十七世紀末の京都の地誌である『京羽二重織留』に名酒屋として「。御水尾院様御製あり 堀川

六角下ル 有明 富田屋 。東福門院様御作 堀川丸田町上ル町町
花橋 坂田屋 。鷹司前関白様懐紙あり 油小路竹屋町下ル町 蘭菊
関東屋 。女院御所様御製 右同断 竹葉・若みどり 井筒屋 。日
光御門跡様御作 右同断 初ざくら 広永や 。妙法院御門跡様御作
新町通一条上ル さざれ石又まひ鶴 重衡」とある。⁽²⁾ 有名人により名
付けられたという表示はしばらく後の『京羽二重・明和(一七六四〜
一七七二)版』にも多く記載されている。⁽³⁾ しかし、さすがに江戸末の
『京羽津根・元治版』(一八六四)の名酒屋では酒銘の由来表示はわ
ずかになっ⁽⁴⁾ていて。

酒は文化であるとしてよく云われるが、日本で最初に始まった酒銘の典故が和歌であり、それが江戸時代を通じてずっと続いてきたという事実をみると納得できる。昔は酒というものの社会的価値が随分高かったことを示すものであると思われる。

二、高木家文書酒銘の特徴

酒銘というものは、その当時の人々の夢や希望の反映と思われるものが多い。高木家文書の酒銘と昭和七年京都酒造組合の酒銘を比較⁽⁵⁾し、どのような違いがあるか検討してみた。高木家文書の酒銘には別表のように菊、梅、橘、桜等の花の名称、川、井、水、露等の水関係の名称、松、緑、葉等の緑の植物名、山、春等の自然現象名等が非常に多いが目につく。ついで多いものに、寿命ある人間の当然の願望と考えられる不老長寿を願って、千世とか万代というような酒銘が多い。動物では鶴が圧倒的に多く、亀は数例のみで、他の動物名はほと

んどみられない。鶴や亀などの実際の寿命はともかくとして、人間より寿命の短い動物は憧れの対象にはなり得なかつたものと思われる。植物は冬の寒さにもじっと耐え、春になると必ず新しい緑を萌え出させ、花を咲かせる。人の世話にならず長年生き続ける緑の植物の生命力に畏敬の念をいだいたのであろう。又地下よりこんこんと湧き出る井水、泉井、集って流れ、岩をも、山をも削り取って行く川の流るれ、朝になると植物の葉にキラキラ光る露の発生等に美しきもの、人力の及ばぬ自然の偉大さを見出していたのもあろう。同じようなことを雄大な山、峻しい自然から脱した春等の現象に見出していたものと思われる。この頃は、現代にくらべ人間はぢかに自然に触れることが多く、自然の力に神に対するような畏敬の念をいだいていたのである。したがってこれらの名称を酒の銘としたのはうなずけることである。

この時代にあつては、商標権というような考え方はまだ一般に成立してはいないらしく、何軒もの酒家で同一酒銘を使用している例が多い。数の多いものを第三表に示した。若緑、菊の露、花橘、白菊、若松、千代松、音羽等はその代表的なものである。逆に云えば、このようなものが当時の人のあこがれの対象であつたとも考えられる。

これに対して、昭和七年の京都の酒銘をみると、花、水、植物、鳥、山等の自然が多いことに変わりはないが、それらの全体に対する比率は、ぐっと下がっている。高木家文書では、花、水、植物、鳥、自然現象、不老長寿等に入らないその他のものは四二点で全体の一二%にしかすぎない。しかし、昭和七年になるとその他のものが断然多

く四三九点を数え、全体の六一%と過半数を越えている。昭和七年頃になると、社会は江戸時代よりもずっと複雑に発達してきたため、単なる花鳥風月等の自然現象は、憧れの対象からはずれてきてしまったものと考えられる。この複雑になった社会事象に対応する酒銘が、数多く現われてくるようになった。たとえば鉄橋、スイートホーム、本墨打、商戦、武旗勝冠等、昭和初期の社会を反映している酒銘もある。そのほか、宝、盛、冠、長、司等という字を用いたものが多く、「出世長、栄進、栄自慢、進歩長、最高の日」など、社会における成功を願った人々の願望を反映しているようなものも多い。数の上で最も目につくのは、〇〇正宗という酒銘で五七点にも上り、当時、酒は正宗という流行があつたことを示している。

このほか、高木家文書ではほとんど無かつた動物が多くでてくる。高木家文書になく、昭和七年に多くでてくるものをあげると、龍(十)、鷹(八)、鳳凰(七)、馬(六)、鯛(五)等である。この頃になると架空の動物、龍や鳳凰に憧れを抱くようになり、鷹や鯛が目出たいものの代表になってきている訳である。このほか、ナシヨナリズムの動きがあつた時代を反映してか、忠魂、富国益、金鶏熟草、極東などという酒銘もある。

高木家文書に多く、昭和七年にはほとんどみられなくなったものに、橘、水、川、井、露、松、緑、葉等がある。緑の植物や、水、川等に憧れを抱かず、これらは、むしろ利用の対象と考えられるようになったのではないだろうか。理由はよく分からないが、花の中で橘だけが価値がひどく下っている。

三、酒銘の発生

中世の酒造業は、他の一般手工業と異なり、当時としては多くの生産設備を必要としたため、多額の資本が必要であった。そのために、酒造業は土倉等の兼業によるものが多かった。室町初期の応永三十二年（一四二五）の京都における酒屋数は、三百四十二軒の多きに達していた。これらの酒屋はすべて前号に示したように越前、上総、讃岐、三位、待従等の屋号を持っていたが、まだ酒銘の使用はみられなかった。しかし、これより五十年ばかりあとの文明（一四六九〜八七）の頃には、すでに商標志向を持つ業者があらわれた。商標志向の発生は、屋号成立より派生して来たものであるといわれている。酒造業界に於いて、初めて商標が京都に表われるに至ったのは、京都が政治の中心として大都市となり、大きな消費地になったことと、競合する酒屋が京都に多かつたことに起因する。大きな生産設備を整え、生産数量が大きくなった酒屋が、自家の醸造酒なることを消費者に意識せしめ、もってその販路の維持拡大をせんとしたことによるものである。大柳酒屋一類が、文明年間に自家使用柳樽に六星紋の印を使用し、他の酒屋の盗用を禁止したが、酒銘、商標使用の最初であるといわれている。狂言「餅酒」に「松の酒屋や梅壺の柳の酒こそすぐれたれ」とうたわれている如く、当時京都第一の酒であった柳酒のほか、に梅酒や松酒が有名であった。柳酒はこの頃から、江戸初期まで、京都貴頭の贈答品として数かぎりなく、その名前がでてくる。前出狂言

の中の松の酒屋については分かっていないが、梅酒屋は小原を名乗り、芸能方面にも関わりをもっていたが、文明十一年（一四七九）には時の將軍足利義尚がおとづれているほど有名な酒屋であった。このように室町中期より酒銘なるものが発生してきたのであるが、それが他の酒屋に普及するのはもう少し後のようである。永正十二年（一五一五）の（13）小西文書にでてくる酒屋は、中村与四郎、手嶋新二郎等の個人名や、はな帯屋、ひもの屋、豆腐屋等兼業商売名を使用していると思われるものもあり、酒屋らしい屋号の統一性が全く失われている。この頃相つぐ戦乱のため京都が焼野原と化し、大消費地としての役割が一時的に減少したためであろうか。当時は、商標志向というものが一時衰えたようで、小西家文書には、勿論酒銘の記載はない。

この頃から江戸時代初期までの酒銘を調べてみると、次のようである。室町時代中期の関白一条兼良（一四八一年死）の『尺素往来』には「酒者柳一荷、加之天野、南京の名物、兵庫西宮之旨酒、及越州豊原、加州宮腰等」とある。（16）室町時代末期の連歌師肖相のあらわした『三愛記』に「九州のねりぬき、加州の菊花、天野の出群成るをもとめん」とある。（17）『大閤記』の醍醐の花見（一五九八）にでてくる酒も「加賀の菊酒、麻地酒、其外天野、奈良の僧坊酒、尾の道、児島、博多の煉、江川酒等」である。（18）江戸初期の俳書『毛吹草』にも諸国銘酒として「山城 屠蘇白散・味淋・消酎・南蛮酒、大和 僧坊酒、河内 天野酒、摂津 須磨濁酒・伊丹酒・富田酒、遠江 菊川酒、伊豆 柄川酒、若狭 小浜酒、越前 大野酒、加賀 菊酒、出雲 杵築酒、備前 小島酒、備後 尾道酒・三原酒、紀伊 若山忍冬酒・延命酒、伊

予 島後酒、筑前 博多練酒、豊前 小倉酒、豊後 麻地酒、薩摩

アハモリ酒」と出ている。⁽¹⁹⁾

これらの中で、「柳」は酒銘と考えてもよいと思われる。「菊酒、練酒、屠蘇、味淋、消耐、南蛮酒、濁酒、忍冬酒、延命酒、アハモリ酒」は酒の種類名であり、あとは全部産地名である。いずれも、地方の酒が名酒として京都で知られるようになったことを示しているが、個々の酒屋の酒銘ではない。個々の酒屋の酒銘が文献上にはつきり出てくるのはもう少し後である。貞享元年（一六八四）に成立した『雍州府志』には「花桶酒、蘭菊酒、山川酒」などはつきり酒銘がでている。⁽²⁰⁾貞享二年（一六八五）の『京羽二重』には名酒屋として「。東洞院五条下四丁目 平野屋 源漢酒。下立売室町西へ入町 花桶。堀川姉小路上ル町 こんだや 有明。油小路五条 三笠丸 雪酒。御幸町竹や町下ル町 河内や 七賢酒。油小路下立売上町 大明玉 雲酒。高倉三条下ル町 万葉酒」と出ている。⁽²¹⁾

これらの文献から、酒銘は京都において室町中期、文明前後に発生し、相当普及していたと考えられるが、途中一時やや停滞し、その後、室町末期より江戸初期までの間に京都の全酒屋に普及したらしいと推定できる。しかし、その間を永正十二年（一五一五）から貞享元年（一六八四）の間と考えると約百五十年という長い期間になる。いずれにしても世の中が治まり、大量生産に伴う競争が、酒銘というものを必要とし、発展させたものと考えられるので、京都の混乱が治まった安土・桃山時代から江戸時代のごく初期の間に京都の全酒屋に普及したのではないかと推定される。この間に、酒銘のあらわれる文献を捜すことが必要と思われる。

文 献

- 1 『酒史研究』2 一頁 昭和六十年四月
- 2 弧松子『京羽二重大全』六卷、貞享二年（一六八五）、洛中洛外の地誌、増補したものに『京羽二重織留』がある。（『古事類苑』、「飲食部」）
新増『京羽二重大全』、「古事類苑」、「飲食部」。
- 3 名 酒 所
後水尾院様御銘 有明 堀川六角下ル町 八文字屋
東福門院後水尾后様御銘 花桶 堀川丸田町 坂田屋
鷹司前関白様御銘 蘭菊 油小路竹屋町下ル町 関東屋
女院御所様御銘 竹葉・若みどり 右同断 井筒屋
日光御門跡様御銘 初ざくら 烏丸夷川上ル町 広長屋
妙法院御門跡様御銘 さざれ石又まひ鶴 新川通一条上ル 重衛
北野経王堂前 この花 津国屋
富小路松原下ル町 榊 葉 近江屋
四条烏丸東江入町 みたらし 穂積屋○下略
- 4 『京羽津根元治版』、「古事類苑」、「飲食部」。
- 5 『日本登録商標銘鑑』、昭和七年十一月、敬文堂書店。
- 6 小野晃嗣『日本産業発達史』至文堂、昭和十六年三月、再版、法政大学出版局、一九八一年五月、一四八、一八七頁。
- 7 北野神社洛中洛外酒屋名簿、応永三十二年（一四二五）。
- 8 小野晃嗣『日本産業発達史』一五三頁。
- 9 『京都の歴史』、京都市編・刊、第四卷、十七頁。
京都の人口、十五世紀約十万人、十五世紀末、十七、八万人、十六世紀末十七世紀初二十万人以上。
「京都御役所向大概覚書」
元禄三年（一六九〇）三五万五四九人
正徳五年（一七一五）三五万九八六人
- 10 『親元日記』、文明十年（一四七八）四月十八日条
一、大柳酒屋中興申す奉書 布野州より到来中興新左衛門尉家俊申、柳桶六星紋の事家俊一類に於は之を用うる処、近年猥りに非分の輩此

の紋を付くると云々、太だ謂れなし、所詮、速かに之を停止せしむべし、若し又相統の子細あらば、之を明白にすべき由候なり、仍て執達件の如し。

英基判

四月十七日

貞康 此の一通を以て政所
公人へ之を相触る

酒屋 中

11 『看聞御記』永享八年(一四三六)十二月条

『東寺文書』永享九年(一四三七)四月十三日条

『蔭涼軒日録』文正元年(一四六六)七月四日条

『北野社務引付』天正十二年(一五八四)正月十日条

『枕舜日記』元和四年(一六一八)正月二十一日条

『土御門泰重卿記』元和二年(一六一六)十二月九日条

(東京大学史料編纂所編、大日本史料、昭和四十九年)

12 『晴富宿禰記』文明十一年(一四七九)五月廿三日条(東京大学史料編纂所編、大日本史料、昭和四十九年)

18 『蔭涼軒日録』延徳四年(一四九二)三月九日条(東京大学史料編纂所編、大日本史料、昭和四十九年)

14 『尋尊大僧正記』文明十一年(一四七九)十月廿九日条(東京大学史料編纂所編、大日本史料、昭和四十九年)

15 『小西家文書』洛中洛外酒麴役を負担した酒屋一三九軒(『京都の歴史』四卷、三〇七頁)

16 『尺素往来』往来物の一種、室町時代中期、一条兼良(一四〇二~八一)が撰作と伝えられる。日常生活に必要な語彙を項目別に収録したもの。

18 肖相『三愛記』永正十年(一五一三)『群書類従』第二十一巻所収)

19 小瀬甫庵『太閤記』寛永二年(一六二五)刊。

18 松井重頼『毛吹草』正保二年(一六四五)刊、七巻五冊、俳書、諸国物産も収録(『古事類苑』「飲食部」)

19 黒川道祐『蒲州府志』十巻十冊、貞享六年(一六八四)山城国の総合的組織的な地誌(『古事類苑』「飲食部」)

20 [注] 酒銘の分類は酒銘の一番最後にくる文字が何であるかによって分

けた。例えば「亀の井」は井の分類に入れた。

〔酒銘の出典〕

(酒銘及び出典)

(酒家名)

九条家御銘

初花 染

茶屋久左衛門

白雲ハさもたたハたてくれないの

いさしほを君しそむれば

清水谷家右同

遅 桜

なつ山の青葉ましりの遅桜

初花よりもめつらしきかな

小倉家右同

山吹及井

榊屋喜兵衛

駒とめてなのお水かはん山ふきの

はなの露そふ井手の玉川

宝鏡寺宮右同

友 鶴

佐野屋忠兵衛

長閑なる君か雲井の友鶴ハ

おなしちとせをさそ契るらし

右同断

松 農 花

佐野屋伊右衛門

まつのはな十かへり咲る君か代に

なにをあらそふ鶴のよはひそ

玉葉

白 菊

百敷の大官人のけふといへは

かさしにさせる千世の白きく

玉吟

難 波 江

なにハ江に霜を払ひし芦田鶴の

立やかすみのはるのきち路も

二条家御銘

菊 能 露

露なから折てかさゝん菊のはな

おひせぬ秋の久しかるへき

右同断

渚 の 花

又たくひ渚の花の名残まで

あかぬ宝のはるのさかつき

右同断

花 の 鏡

及人も老せぬ影やうつすらん

はなの鏡のきくの下みつ

夫木

玉 乃 井

秋の色をやゝミかの原泉川

玉屋 小兵衛

津国屋与惣右衛門

大文字屋仁兵衛

結へハ露の玉の井のミツ

千載

花 桶

たゝならぬはたちはなの匂ふかな

よそふる袖は誰となけれど

玉葉

緑

万代を君にまかせて松かえの

ふかきみとりも色を添らん

風雅集

岩 の 原

久かたの天の岩ふねこきよせし

神代のうらや今の御生野みまれの

養 老

酌そふるなさげに老をやしなふは

もゝのくすりの中(ま)にをとなる

妙法院宮御銘

千 代 姿

すき来にしほどをハすてつ今年より

千代ハかそゑんすみよしのまつ

宝鏡寺宮御銘

玉 松 可 え

枳屋藤兵衛

枳屋九兵衛

三文字屋喜兵衛

鍵屋茂兵衛

舛屋弥兵衛

常盤なる玉松かえも春くれは

千世の光りやみかきそふらん

万里小路家右同

菊 能 露

仙人のおる袖にはふ岸(菊)のつゆ

うち払ふにも千世ハ経ぬへし

枳鍵屋甚兵衛

ま 須 花

年々に咲ます花の色に香に

すゝめん酔のはるも幾しほ

巢 立 鶴

呑人のよハひ永かれ巢立鶴

たたへしかめの万々年も

妙法院官御銘

若 姿

ときハなる松のみとりも春くれハ

いざ(ま)しほの色まさりけり

右同断

宿 梅

とめこかし梅さかりなる我宿を

うときも人ハ折にこそよれ

九条家御銘

花 桜

三文字屋市兵衛

紅のうす花さくら匂ハすは

みな白雲とみてや過まし

延文御百首

菊 水

絶せしな流れをくみて久かたの

雲のうへなる菊の下水

丹波屋利兵衛

正親町三条家右同

古と婦起

行末は猶酒かめの口広く

ことふきはやせ千と世万代

丹波屋八兵衛

中山家右同

梅 可 え

梅かえにふりつむ雪はうくひすの

はかせはかせにちるも花かとそみる

秋田屋三左衛門

九条家右同

姿 の 緑

千とせまで限れる松もけふよりも

君にひかれて万代やへん

伏見宮右同

曙

人とハ見すとやいはん玉津嶋

かすむ入江のはるの曙

八文字屋茂兵衛

夫木

薄紅梅

富田屋庄兵衛

折てみん軒端の梅の紅井くれないに

うすくふりなす雪の一えた

鷹司家御銘

菊乃水

金屋平兵衛

山人のよハひをのふるきくの水

流れをくむも千代ハ経ぬへし

右同断

岩根酒

諸人の老をわするゝ岩根酒

たぎつ流れをうけてつくらん

武者小路家右同

常盤春

堺屋五兵衛

ときハなる松の緑も春くれは

今一しほの色まさりけり

近衛家右同

谷川

菱屋平兵衛

菊の花あらひて落る谷川の

なかれをのむハよハひのふてふ

初霜

菱屋半兵衛

栄へある宿のためしと竹の葉の

みとりにおける千代のはつ霜

万葉

三甕春

菱屋藤九郎

みかの原ふたいの野へを清見こそ

大宮所定めけらし(もか)な

西園寺家御銘

二葉

堺屋利兵衛

引植し子日の小松ふた葉より

ちぎるも遠き千世の行末

右同断

若水

八文字屋太兵衛

春をえてけふ奉るわか水に

ちとせの影やまつうかふらん

冷泉家御銘

幾世松

八文字屋又兵衛

霜のゝちふりせぬ色もあらはれて

いくよの松の風さかふらん

(船)
西織家右同

琴乃音

丸屋太兵衛

松かせのおとに通(みだるか)へる琴の音を

ひけハ子日の心地こそすれ

正親町家右同

幾千世

和泉屋庄兵衛

幾千世とかきらざりけるかきらざりけるくれ竹(やせ)

右同断
君かよハひのたくひなるらん
みちとせ

めぐりこん弥生も久し三千年

なるてふ桃のはなのさかつき

新後撰

婦多葉

若松屋十助

二葉なる子日の小まつ行すへに

花咲まても君そみるへき

伏見宮御銘

花農鏡

八文字屋吉兵衛

影うつすはなの鏡もくもりなく

ちよもてめぐるはるのさかつき

綾小路家右同

梅可え

八文字屋半兵衛

梅かえの軒端久しきにほひにて

くもぬのはるに風ものときき

新拾

本泉酒

庭清ミなかれ絶せぬ水の面に

花のほひをうつしてそみる

新千載

鸛乃声

小松屋甚兵衛

君か代のちとせの数をよハふなり
雲井に高き鶴のもろこゑ

拾遺

泉川

いつミ川長閑き水の底なれハ

ことしハ数そすみ増りける

千種家御銘

古乃松

大津屋八兵衛

たくひなき千とせの色はこの松の

宿とハ汲てもろ人もしれ

古能花

津国屋権兵衛

津の国のあしやよしやと人とハ

この花さけるみきとこたへて

御豆首

菊乃種

分銅屋長右衛門

ちの秋かさゝん菊ハ九重に

山路のたねやうつし植けん

御銘

蟬小川

松屋吉右衛門

石川やせミの小川の清ければ

月もなかれをたつねてそすむ

高倉家御銘

見 馴 川

世中ハなと大和なる見馴河

みなれ初(す)てそ有(ま)へかりける

木屋久左衛門

巴満院御門跡御銘

菊 能 露

千とせこそ君かつむへき菊なれハ

露もあたにハなりしとそおもふ

麴屋六右衛門

右同断

九 重

庭の面にちりてつもれる紅葉ハ

ここのへにしくにしき成けり

御銘

舞 靄

白くもに羽打かけてとふ鶴の

はるかに千代のおもほゆるかな

重衡平右衛門

妙法院宮御銘

細 石

君か代ハちよにやちよに細石の

いはほとなりてこけのむすまて

右同断

御 手 洗

きく度にたのむ心そすみまさる

かもの社のみたらしのこゑ

寿 命 水

庭清き松の下水むすふ手の

しづくも千世の影そうつれる

麴屋孫右衛門

外山家御銘

山 人

世によほふ其名を何と尋ねけん

よハひそ永きやまの山人

俵屋清兵衛

御銘

万 代

君か代を幾万代とかそへても

なにたへんあかぬころを

金屋治郎兵衛

菊亭家御銘

菊 能 下 水

山川の菊の下水いかなれば

なかれて人の老を防くらん

木屋八兵衛

拾遺

残 菊

咲花のいまハの霜に置とめて

のこるまかきの白菊の色

文和五二御会

若 緑

栄へ行松の緑の松の色に

つきせぬ御代の恵みをそしる

岩倉家御銘

曲 水

けふこそとうきハの花の木蔭行

水にかずそふ桃のさかつき

清水谷家右同

千世若水

君かためみたらし川を若水に

結ふや千世の初めなるらん

夫木

小野川

八瀬川のせゝのあせきにせきとめて

みつ引かくる小野ゝなハしろ

堀川百首

常盤木

ときハ木の緑はなへて替らねと

風のしらへそ松ハことなる

続拾

梅 枝

袖ふれハ色までうつれ紅井の

はつ花そめに咲る梅かえ

妙法院宮御銘

斧 柄

末とをき山路の菊ハ斧のえの

丸屋市兵衛

御銘

花 橘

五月まつ花橘の香をかけハ

むかしの人の袖のかそする

和泉屋庄兵衛

坂本屋惣兵衛

高野家御銘

み可の原

みかの原わきて流るゝ泉川

いつミきとてか恋しかるらん

大黒屋長右衛門

新古今

清水柳

道のへにしみつ流るゝ柳かけ

しハしとてこそ立とまりつれ

伊勢屋八右衛門

菱屋権兵衛

嘉暦御会始

松の葉

幾かゑり千世を重ん松の葉の

ちらぬ緑をありかすにして

秋田屋太兵衛

鱗形屋源兵衛

〔注〕 ありかす||有数……この世に生存する齡の數

代々梅

袖ふれし世々に替らぬ梅かゝや

今とふ宿のしるへなるらん

丸屋伝右衛門

菱屋善兵衛

松尾社御法楽

若 緑

夏の来て茂れる木々の若緑

いろ珍らしくみるも涼しき

大津屋勘兵衛

類題雑

雛 鷺

巢立ぬる松の葉かすを有かすに

よハふや幾世ひなつるのこゑ

大黒屋権兵衛

岩 井 亀

万代を君にやちぎる庭井なき(岩か) (ゐる)

ふちに住てふ亀のよハひも

新千載

句 の 梅

移しても猶こそ句へ梅のはな

人の袖より過るはるかぜ

堀川百首

花 薄すすき

夕きりの絶間にみれハ花すすき

ほのかに誰をまねくけしきそ

藤屋作兵衛

永和御会

菊 仙

斧の柄の朽し山路の露のまに

秋もちとせと句ふしら菊

御屏風

千 年 酒

九重のちとせのかめにさす菊の

匂ひもふかくかけることの葉

丁字屋甚兵衛

一条家御銘

籬 乃 竹

植てみるまかきの竹のふしことに

こもれる千世ハ君にかそへん

舛屋庄兵衛

続撰吟

玉 能 井

夏になき千世のよハひをひさ方て

結ぶにきよき玉の井のミツ

和泉屋平兵衛

宝治百首

白 菊

廻りあふ月日も同し九重に

かねてそみゆる千世のしらきく

新後撰

梅 花

折て見る色よりも猶梅のはな

深くそ袖の香ハにはひける

菱屋市郎兵衛

玉 吟

雲 水

一とせやうつる野沢の春のミツ

夏の雲行ミねもさたかに

夏衣

立よれば涼しかりけり夏ころも

あきやいつミの底にすむらん

木屋新右衛門

河間玉置玉井金輪以五色糸為繩

夫木

玉瀛

古しへのさつけし玉ハ王おおうみの

しほひ塩ミつころ成けり

〔注〕瀛……大海のこと

高嶋屋与兵衛

結手

むすふ手の袂すしく成行は

泉に秋はすむにや有らん

草庵集

老楽

更さらてたにだに身の老らくハ知れぬに

いと忘るゝ花さかりかな

和泉屋庄兵衛

宝鏡寺宮御銘

岩根

神代より久しかれとや動なき

いわねに松の種をまきけん

舛屋七兵衛

万葉

浅香山

あさか山影さへみゆる山の井の

あさき心ハ我（を）おもはなくて

雛屋権兵衛

新千載

薄紅葉

秋の色は外山のミねの薄もみち

よしや時雨に猶そめすとも

堺屋六兵衛

都乃春

初はるの花の都に松うえて

民の戸とめる千世そしらるゝ

玉吟

朝日山

待出る朝日の山の梅のはな

八十民人も袖匂ふらし

若松屋六右衛門

後撰

花橘

昔しをハ花たちはなのなかりせば

なにゝつけてか思ひ出まし

伽藍記言

玉の井

雛 靄

ひな鶴のよハひハ松に相生の

いつれ久しも宿にかそへん

夫木

花の鏡

咲匂ふ梅津の川の花さかり

うつる鏡のかけもくもらす

菱屋五兵衛

宝治御百首

白菊酒

九重にかさねて匂へ乙女なる

立まふ袖にまかふ白ざく

永和御会

八重菊

見れハ猶八重にもあまる九重の

月をかさねてさける白ざく

鍵屋勘右衛門

千五百首

千世の松

山の端のかすみを分て出る日の

のとかにめぐり千世のはつ松

宝治御百首

菊の露

折得たる菊の白露盃に

くみて尽せぬ御代ハみえけり

堀川百首

山路

峰つゝき松の木しけくみゆるかな

これやちとせの山路成らん

続後撰

玉椿

千早ふるいつのお山の玉つはき

八百万代も色ハかハラシ

古今

都農春

見渡せハ柳さくらをこきませて

ミヤこそ春のにしき成けり

拾遺

三笠山

万代とみかさの山そよハふなる

あめの下こそ楽しかるらし

続千

慮橘

袖ふれし昔の人そ忍へるゝ

はな立花のかほるゆふへは

花橘酒

とふちより吹来る風の匂ひこそ

八文字屋七兵衛

花たちはなのしるへなりけり(れき)

千首

宝 萊 山

万代をたもつ葉も亀のうへの

やまより今そ君につたへん

羈 声

万代と限らぬ田鶴の声そする

いく万代と君さかへけん

大炊御門跡御名

千 と せ

ちとせをハ万代までも汲あらし

末なかゝれといのる白いと

右同断

白 糸

布引の瀧の白糸うちハへて

たれ山風にかけてほすらん

夫木

蓬 菜

君か代ハよもきか嶋もよりぬへし

いくくすりとる住吉のうら

新古今

脛 月

河勝屋伊兵衛

照もせずくもりも果ぬ春の夜の

おほろ月夜にしくものそなき

狂言

千 世 羈

此酒を松の露ほと汲下戸も

いく千世つるのよハひのふへき

有 明 酒

有明の心地こそすれさかつきの

ひかりもそひていてぬと思へハ

古今

難 波 春

(難波律子)
難波に咲やこの花冬こりも

(ほち)
いまを春へとさくやこの花

御 祓 川

何事もおもハすなりぬ御祓川

ミつにこゝろのうきを流して

宝治御百首

志 ら 菊

九重にちよをかさねてかさす哉

けふ折得たる白きくのはな

醍醐屋喜兵衛

八文字屋久左衛門

大阪屋久兵衛

舛屋源兵衛

夫木

幾世

春ハマツミつき備ふる国ふみを

さして幾世も君のミそ見ん

堺屋源兵衛

元久元年御会

若松

木のまより月もちとせの秋に出で

きみか代契る庭の若まつ

夫木

泉川

山城のやまとに通ふいつミ川

これや御国のわたり成らん

井筒屋市兵衛

新拾遺

八百万代

松かえもやを万代の色にそふ

ちとせもあかぬ我君のため

堺屋利兵衛

夫木

宝の市

市姫の神のいかきのいかなれや

あきないものに千世を積らん

大黒屋藤右衛門

新拾

朝霞

天の戸の明るほとなく来る春に

たちもおくれぬ朝かすみ哉

津国屋喜右衛門

続右

柳酒

浅みとり染かけたりとみる迄に

はるの柳ともえ出にけり

鷹金屋与左衛門

古今

岸の松

我みても久しくなりぬ住よしの

きしの姫まつ幾世へぬらん

鷹金屋与左衛門

夫木

泉川

いつミ川行瀬の水の絶ハこそ

大宮所うつろひゆかめ

井筒屋市兵衛

古今

花橘

五月まつ花たち花の香をかけハ

むかしの人の袖のかそする

菱屋仁兵衛

夫木

順乃舞

唐人の跡をつとふるさかつきの

浪にしたかふけふも来にけり

玉屋太兵衛

続後撰

三笠山

浅みとり三笠の山の春かすみ

万屋吉兵衛

たつやちとせの始め成らん

古今

志ら玉

亀の尾の山の岩ねをとめて落る

瀧のしら玉千世の数かも

瀧糸

石はしる滝の白糸打はえて

なかき日暮し夏そ涼しき

徳治御会始

友霧

猶もまたちとせのよハひ契るらし

ひさしかるへき御代の友つる

堀川百首

泉能井

立よれハ涼しかりけり夏衣

あきやいつミの底に住らん

統千載

菊千世

行末の神を重ねてここのへに

千世の影見る白菊のはな

元亨御会始

相生酒

ちとせとや色そふ春を契るらん

我君か代に相生のまつ

壬生宮

泉川

白妙の夕なみ涼しいつミ川

はその森の竹の下ミち

〔注〕 ははそハ柞……コナラ・クスギ・オオナラなどの総称。

「はは(母)」にかけていう。

新拾遺

堂可袖

たか袖の名残をとめて橘の

昔しかわらぬ香に匂ふらん

千載

花橘

只ならぬはな橘の匂ふかな

よそふる袖ハ誰となけれと

宝治御百首

不老酒

九重に久しくめくるもろ人の

おひせぬ秋のきくのさかつき

統拾遺

菊能露

汲てこそ千とせも兼て知れけれ

槌屋惣兵衛

三文字屋平兵衛

中村屋勘左衛門

ぬれてはすてふきくの下木

統古今

蟬 小川

平野屋九右衛門

君か代も我代も尽し石川や

せみのを川の絶しとおもへハ

御室御所御銘

三輪 山

我庵ハみわの山もと恋しくハ

といてもきませ杉立るか

岩 井

万屋七兵衛

常盤のかけの岩井のしづれ水

なつを覚へぬ名にこそ有けれ

禅林殿七百首

八重 桜

和泉屋茂左衛門

はるの日に光りを添て九重に

さかり待るゝ八重さくらかな

続後撰

松 可え

幾帰り同し千とせを重ぬらん

きみをためしの春のまつかえ

類題

鷲 農 友

鱗形屋又右衛門

和歌のうらに今宵むれいる友鶴の

ちぎりハ千世も絶しと思ふ

新六帖

亀の 井

おのか住水のみとりの亀もしれ

君によそふる万代のはる

続後撰

竜 田 岸

はる風の立田のきしの柳かけ

流れもやらぬなみのした草

拾遺愚草

朝 日 山

紅葉のなを色まさる朝日山

夜のまの霜の心をそしる

神代卷

玉の 井

有一美人排闥而出遂以玉鏡来當汲水

〔注〕『日本書紀』神代下・第十段より

拾玉集

都 清 水

我おもふ契りを水にむすハせて

みやこハはやく春のけしきに

金屋 弥 助

千首

桃 林 水

早く過おそく来るもさまくくに

あかぬなかれの花のさかつき

九条家御銘

相 生

万代に千代をかさねてみゆる哉

かめのおかなる松のみとりに

右同断

初 夜

宵なからさてもねむたく成にけり

夢にあふへき人やまつらん

右同断

菊 水

わか宿の菊のしら露そふことに

いく世つもりてふちと成らん

続拾遺

八 重 桜

九重のまちかき宿の八重さくら

はるをかさねて君そみるへき

名跡志

吉 水

池上に我たにあらはよし水の淵をなれぬ

なかれの末は絶しとそおもふ

松尾法衆

若 緑

若みとり影も木ふかくならかしハ

立ならふへき夏ハ来にけり

長橋御局御銘

若 松

契り置けふもちとせの初めにて

行すえ遠し春の若まつ

植松家右同

春 能 夜

春のくる夜のまの風のいかなれハ

けさふくにしも氷とくらん

誹諧・又

冬 こ も 里

金屏の松よふりたる冬こもり

時ならぬ卯の花垣の冬こもり

咲やこの花雪とみえつゝ

続千載

千 と せ

民やすく国ゆたかなる御代なれや

きみをちとせと誰か祈らぬ

古今

紅 葉

坂本屋吉兵衛

二文字屋市左衛門

松屋庄左衛門

久かたの月のかつらも秋ハ尚

もみちすれハや照まさるらん

六百番歌合

初春酒

伊丹屋甚兵衛

諸人の立いるにハのさかつきに

ひかりもしるし千世の初はる

拾玉集

音羽酒

音羽ゆき卯の花垣に遅桜

はると夏とや逢坂のせき

六百番歌合

若緑

玉屋九郎左衛門

影ひたす水さく色ハみとりなり

にハの木すへのはるの若葉かり

夫木

花桶

我園の花たちはなの色みれは

こかねの鈴をならす成けり

夫木

八重桜

万代の春にもありし八重さくら

なまます神の玉のミツかき

夫木

朝日山

万屋善兵衛

あさ日山嵐や色に出ぬらん

紅葉ふりつむ宇治の柴ふね

貞治二月御会

若緑

年にそふ緑をちよの始にて

君かめくミのまつも小高き

古今

浅香山

和泉屋喜兵衛

浅香山影さへミゆる山の井の

あさくハ人をおもふものかハ

宝治御百首

千世代

九重に千世を重ねてかさす哉

けふ折得たるしら菊のはな

信太社

貨泉

君か代に泉のミつの絶すして

いく千とせへん松の下かせ

新古

呉竹

岡松屋太助

時雨ふるおとハすれとも呉竹の

など世と共に色も替らぬ

樋口家御銘

亀の井

万代も宿にちきりて庭清く

くむともつきし亀の井の水

夫木

橘酒

橘の立栄へたる臺うたなより

ミのなり出る時にあへるか

古今

蘭酒

なにかきてぬきかけし藤袴

くる秋ことに野へをにはハす

転法輪三条家御銘
砂こし曙酒

棹姫のおもかけにほふ曙の

かすみをうつすはるの盃

夫木

八年酒

君か代ハから紅井の深色に

八千とせ椿もみちするまで

堀川百首

玉の井

玉の井に咲るをミれハ山吹の

万屋吉右衛門

茨木屋甚左衛門

古今

千世靄

万代を松にそきみをいわい鶴

ちとせのかけにすまんとおもへハ

宝治百首

春乃夜

春の夜の霞に匂ふ光りにも

くもらてふくる月ハみへけり

新後撰

和可葉

春の野々初根の松の若葉より

さしそふ千世の影ハ見えけり

夫木

白玉

千世の宿に御舟かんと白玉を

いわねよりしく庭の瀧なみ

夫木

三宝

神代より三くさの宝いたはりて

とよ芦原のしるしとそなる

難波ふ里

菱屋喜左衛門

藤屋吉兵衛

なにハ人ふりさけ見らん雲かゝる

生駒たかねの初さくら(わか)はな

夫木

あ越尔よし

龍たつの馬まをあれば求ん青によし

ならの都にこん人のため

福聚あつめ

あら玉のとしの始にかくしこそ

千年とかねて楽しきをつめ

承和二九御会

菊の水

老をせく花のしからみかけてけり

菊の下行谷かわのミツ

玉葉

百代月

日を年にこよひそかふる今よりや

百とせまでの月かけもミン

羈乃舞

芦田鶴の雲井に通ふ声の中に

かねてもしるし千世の行すゑ

菱屋弥兵衛

浜荻

物の名も所によりて替りけり

なにハの芦ハいせの浜おき

老楽酒

植てみる千とせの松の木高きに

わか老楽のおもほゆるかな

宝治歌合

松乃葉

枝かハす神路の山の松の葉に

きみかちとせの影そ見へける

千首

八重垣

たのもしな道をひろめし行末ハ

千世をこめたる出雲八重垣

古今

紅葉

山川に風のかけたるしからみは

なかれもあへぬ紅葉なりけり

飛鳥井家御銘

若緑

老たるもくめハ心も若みとり

かハラぬ友やありし竹の葉

河内屋六兵衛

穂積屋市十郎

(馬)
が元御百首

初 緑

一しほのみとりもそへて高砂の

まつハ老木も春をしりぬる

宝治御百首

委 枝

藤浪のかゝる盛りになりぬれハ

さらに花咲きしのまつかえ

山本家御銘

千世の靄

松嶋のまつにむれいるあしたつ

をのかさまくみえしちよかな

夫木

八 千 世

色かへぬ常盤のミねの玉椿

きみか八ちよの卯枝にそきる

〔注〕

卯枝うづえ||卯枝うづえ…五色の糸で美しく巻き、邪気を避けるという
意味から、昔、正月初の卯の日に祝儀に用いた杖。

富 士 雪

ふりそめし神代おもふに日の本の

玉のひかりの富士のしら雪

金屋忠兵衛

藤屋平兵衛

玉屋治兵衛

三 笠 振

けふまつるしるしにとてや往昔ハ

三笠とともに天くたりけん

甘露寺家御銘

若 緑

若みとり露吹みたすあさ風に

きのふの花もちるかこそみる

右同断

初 桜

宿からや春の心もいそくらん

ほかにまた見ぬ初さくらかな

西三条家御銘

雛 靄

鶴の子の又やしハ子の末までも

ふるきためしを我世とやミン

舛屋甚兵衛

宝鏡寺家御銘

千世乃始

うつし植る松の緑も君か代も

けふこそ千世の始めなりけり

木綿屋七兵衛

右同断

幾 千 世

いく千世と限らぬ田鶴の声すなり

雲井のちかき宿のしるしに

夫木

冬 梅

冬ふかく垣(まが)ねの梅そにほふなる

菊よりおくのはなにや有らん

古今

浪 花

草も木も色替れともわたつみの

なみの花にそあきなかりけり(るま)

拾遺

園 乃 桃

みちとせになるてふ桃のことしより

花咲はるにあひにけるかな

武者小路家御銘

老 の 友

高砂の松もむかしに成ぬへし

なを行すゑは秋の夜の月

安井御門主右衛門

八 重 桜

古しへのならの都の八重ざくら

けふこゝのへに匂ひぬるかな

右同断

遠 山 鳥

桜さく遠山とりのしだりしだりお尾おの

年中行事

幾 千 世

いくちよも絶すに到みな月の

けふの醴酒も君かまにく

古今

春 風

春かせハ花のあたりをよきくへまふけ

心つからやうつろふとみん

古今

春 日 野

かすかのに若菜摘つゝ万代を

いわふこゝろハ神そしるらん

武者小路家御銘

霞 の 淵

くみてみよかすみの淵の深ミとり

右同断

緑 酒

色かへぬ門の緑のすへとをミ

ちよの影そふにハの松かえ

松尾社正三位相忠

不 尽 宿

名も高き松の千年の影しめて

増田屋喜兵衛

撰津国屋次郎右衛門

延文御百首

つきせぬやとハ幾世さかへん

白 菊

豊嶋屋治兵衛

限りなき秋とや契る宮人の

かさしにさける庭の白菊

古今

みと里

ときハなる松の緑も春くれは

今一しほの色まさりけり

夫木

朝 霧

菱屋平兵衛

晴行か楨の嶋かせ色みえて

八十氏ひとの袖の朝きり

千載

瀬見小川

山形屋久兵衛

石川やせみの小川の清けれハ

つきも流れを尋ねてそ住

渚の花

また類ひ渚の花の名残まで

あかぬかたのゝはるの御狩場

玉葉

泉 川

平野屋十三郎

月かけも夏の夜渡る泉川

川かせすゝし水の白浪

元亨内御会

若 緑

藤屋孫左衛門

春毎の緑をそへてときわなる

まつにそみゆる千世のめくミハ

夫木

玉 簾

おしおやま小塩山めくる車の玉すたれ

ゆくすへかけて神やしるらん

夫木

不老酒

鍵屋吉兵衛

年ふれと老せぬかを幾千世か

月日のかげのさゝんとすらん

玉吟

音 羽 酒

八文字屋与兵衛

逢坂の関のこなたの音羽川

おとに聞つる春ハ来にけり

禅林寺殿七百首

八重 菊

俵屋孫右衛門

色も香も久しく匂へうつろハて

やえかさなれる白菊のはな

夫木

明本の

相坂の杉よりすぎにかよふなり

祇園精舎のはるのあけほの

統拾遺

奈乃井

君か代のためしに立る松かけに

ちたひや水のすまんとすらん

文安三八御会

深溪酒

谷ふかみ出れる波もこくひまの

おのれ打出てさそふこゑかな

千載

幾世友

我友と君かみかきの呉竹は

ちよに幾世のかけをそふらん

宝鏡寺官御銘

御衣裳川

神風もミもすそ川の流れにて

月日とともにすむへかりける

右同断

梅下風

木の間よりうつる夕日の影ながら

そてにそあまる梅の下かせ

千首

菊の園

仙人の手に任せても植おかん

ちよのたねある秋のしら菊

水瀬殿七百首

若松

ありへけんもとの千とせにふりもせて

わか君ちきる峯の若まつ

康永御会

松可え

君かため今も木高き松かえに

なをいくち世の影をちきらん

後撰

浪乃花

常よりも春辺になれハ桜川

なみの花こそまなくよすらぬ

草庵集

浮世

尋ぬへき太山の奥のなかりせハ

なにをうき世のあらましにせん

鷹司家御銘

千年松

千早ふる神のめくミハ久かたの

近江屋伊兵衛

壺屋久左衛門

玉屋徳兵衛

ちとせの松の四方ニさかえて

羽林軒殿御銘

八重一重

水き江の八重垣つくるみきなれハ

ひとへすゝめて千世を重ねん

軽造

平野屋喜兵衛

鮮于輔曰酔客謂酒清者為聖人

堀川家御銘

白糸

水上に紅葉流れて大井川

むらこに見ゆるたきの白糸

続古今

慮橘

たか袖の匂ひを風の誘ひ来て

花たちはなにうつしそめけん

文明十三御会

和歌の水

玉屋九兵衛

汲しらん我かハあやなわかの浦や

たちかゑる浪のきよきなかれを

玉振集

南陽酒

風も猶のとか成世のこほりあて

池の心もはるにとくらん

新統古

朝日山

万屋伝右衛門

染あへぬ紅葉のいろの朝日山

ふかくも見へぬうちの川きり

智徳院御房御銘

靄の子

中村屋徳兵衛

つるの子のまたやしハ子の末までも

古きためしを我世とやみん

右同断

夕栄

みよしのゝ水分山の高根より

こす白浪やはるの夕はへ

滋井家御銘

千世松

梅鉢屋仁兵衛

春日野に今もて出る千世の松

こたかき影とはやもならなん

高野家右同

中津瀬

近江屋伊右衛門

塵もなく底まですめる中津せの

きよきこゝろハ神やしるらん

清水谷家右同

袖葉

神代より色もかわらぬ榊葉ハ

香さへときハに匂ふなりけり

夫木

若草

遅くとおのかさまく咲花も

ひとつふた葉の春の若草

夫木

朝霞

玉垣の内津御国の朝かすみ

ひかり隔てぬ春ハ来にけり

菊の井

絶すゆく谷の下水底すみて

ちよのかけ見るしら菊のはな

風雅

明保の

おもふ事たれに残して詠置んなまめおた

ころにあまる春のあけほの

永祿九十七会(か)

八重菊

九重に八重咲菊の花のうへに

ひかりをそへて月そやとれる

俵屋弥兵衛

菱屋五郎兵衛

古今

萱草あすな

道しらハつミにも行ん住のえの

きしにおふてる恋わすれ草(ふち)

康永御会

相生

かそへても君こそしらめ相生の

松のちとせのいくかえりとハ

夫木

浜嵐

諸人のねかひをミつの浜嵐(風カ)に

ころ涼しき四手の音かなし

〔注〕

四手し紙垂…神前に供する玉串・しめなわなどに垂れ下げるもの。昔は木綿、今は紙を用いる。

松尾御法楽

八重菊

露なから猶やかさくちんちちち

そても千世ふる八重のしら菊

青蓮院宮御銘

唐錦

おもふとち田居る夜ハ唐綿(まとのせらみ)

たまくおしきものにそ有ける

中村屋市郎兵衛

和泉屋七兵衛

鍵屋忠兵衛

名寄
松可根

松かねの岩根(たむ)の岸の夕涼み

君かあれなとおもほゆるかな

古今

紅葉

久かたの月のかつらも秋ハなを

もみちすれハや照まさるらん

夫木

白菊

秋の色の花のおとと聞しかと

しものおきなと見ゆる白菊

白木屋嘉左衛門

玉吟

浜乃市

辰の市やちとせをかけてくる民も

くにのミヤこの我君のため

夫木

玉水

今ハはやこほりもとけて玉水の

たきつミヤこハ春めきぬらん

玉葉

宇治の瀬

せきとむる宇治の川せ(瀬)の細代木に

あまりてこゆる水のしら浪

油屋治郎兵衛

続千載

加春見

山桜はなの外なるにほ(ひさ)へさへ

なを立そふハかすみ成けり

夫木

扇子

深き夜のあハれしりけん古しへの

はるの扇のつきハ替らし

富田屋庄兵衛

末広

松のかけ千とせの春の末広し

夫木

花橘

忘れすよ右のつかさの袖ふれし

はなたちはな(やま)ハ今かほるらん

勢田屋太左衛門

風雅

峯の春

ふりにける神代もしるし小塩山

同しみとりのみねの松はら

茨木屋惣助

拾遺

菊の露

我宿の菊の白露けふことに

いくよつもりてふちと成らん

夫木

住 農 江

たとふへき方こそなけれ玉津嶋

照しかハせる住の江のつき

靈鑑寺宮御銘

浪 花

にほのうみや月の光りのうつろへハ

浪のはなにもあきハ見へけり

〔注〕にほのうみ_{にほ}鳩の海_{にほ}鳩の湖……琵琶湖の別称

夫木

菊 水

此里に老せぬ千世ハみなせ川

せきいるにハのきくのした水

続拾遺

初 花

袖ふれハ色までうつれ紅井の

はつはなそめにさける梅かえ

藤屋源兵衛

若 緑

君をまつしる人にせん若みとり

ちよ立なれんはるの宿にも

古今

梅 可 え

梅かえに來居る鶯春かけて

富田屋権右衛門

なけともいまた雪ハふりつゝ

新勅

舞 靨

久かたのあまとふ鶴の契り置し

ちよのためしのけふにも有かな

草庵集

千世能奈

子曰して引つるのへの松かえに

かねてちよせも顛れにけり

菱屋吉右衛門

幾世綿

垣ねなる菊の幾世綿今朝みれハ

まねきさかりの花咲にけり

〔注〕幾世綿_{よむわた} 菊の被綿……重陽の節句の行事。前夜、菊の花を綿

でおおって、その露や香を移しとり、翌朝その綿で身体を拭うと長寿を保つという。

玉葉

若 緑

幾とせをふるえの松の若みとり

またたちかへる春や重ねん

康永御会

松 可 え

廻りそふ玉松かえハ君か代に

あへるや千代のはしめ成らん

此と毛

堅田屋源兵衛

この友の此ともなれや松の色

玉振集

瀧波

もろこしもよしや吉野ゝ瀧つ浪

かゝるさくらのはなをやハせん

古今

み可の原

舛屋庄兵衛

都出てけふみかの原いつミ川

かわかせさむし衣鹿背山

三宝院宮御銘

さゝれ石

鍵屋九右衛門

君か代ハ千世にやちよにさゝれ石の

いわほとなりて苔のむすまで

梅下風

うつるかと思ふ匂ひを猶そへて

そてにのミ吹むめの下風

古今

鶯

鶯の谷よりいつるこゑなくハ

はる来ることをたれかしらまし

三宝院宮御銘

奈乃緑

紀伊国屋九右衛門

常盤なる松のみとりも春くれハ

いま一しほのいろまさりけり

新古今

富士曙

天の原ふしのけふりの春の色の

かすみになひく明ほのゝそら

禅林七百首

八重桜

名にしおふその神垣の八重桜

やくものいろそさそまかふらん

梶井御門主御銘

賀茂川

丸屋庄兵衛

かも川の清きなかれハ尽せねは

くむ人ことによハひ久しき

古今

雲井花

八文字屋小兵衛

山高ミ雲井にみゆるさくら花

こゝろの行て出らぬ日そなき

夫木

音羽酒

関こゆる春のつかひや行やらぬ

おとハの山のうくひすのこゑ

若竹

紅屋八郎兵衛

珍らしき声の色にや呉竹の

はるのみとりをうくひすの鳴

夫木

紅井

紅井の末つむ花ハいろふかく

うつるはかりも摘しらせハヤ

古今

初花

谷風に解るこほりのひまことに

うちいつる浪やはるの初はな

玉葉

若緑

更にふそ千とせの春の緑かな

松をハわかぬ君かめくみに

拾遺

相生酒

天くたるあら人神を相生の

おもへハ久し住よしのまつ

丹波屋六兵衛

若松屋吉助

風雅集

瀧糸

松の音を琴にしらふる秋風ハ

たきのいとをやすけて引らん

六百番歌合

玉可つら

ゆふたすきかけてそ頼む玉かつら

葵うれしきミあれとおもへは

有明

今よりハ秋をハすての山さくら

月とはなとの有明のころ

古今

白浪

住の江の松を秋かせ吹からに

こゑうちけふる沖津しら浪

玉振集

若竹

ときハ木に色を若葉の薄もへき

同じ緑の中にすゝしき

草庵集

遠山

春のきるかすみをミれハ足引の

とお山すりのころも成けり

壺屋清兵衛

藤屋治兵衛

永楽屋五兵衛

岡嶋屋九兵衛

新千載

千とせ

今よりハちとせの後の千年をも

きみそかそへて有かすにせん

夫木

音羽酒

春霞たちやこめつるくらぶ山

おとハのみねにゆきもミへねハ
(山名)

古今

菊乃露

ぬれてほす山路の菊の露のまに

いつか千とせを我ハへにけん

類題

和哥の山

うこきなき山の名におふいもとせを

へたてぬ中のためしにもせん

桑原家御銘

岩井水

何となく汲たひにすむ心かな

いわぬのミつにかけうつしつゝ

古今

音羽酒

おとハ山今朝こえくれハほとゝぎす

小堀屋庄兵衛

こすへはるかにいまそ鳴なる

若 姿

はるの野ゝ初ねの春の若葉より

さしそふ千世のかけハみえけり

名跡志

高野川

山城愛宕郡従大原失背流水来證哥未考

新古

若 緑

おしなへて木の目も春の浅みとり

松にそ千世のいろハこもれる

夫木

三宝酒

宝とハ玉をもいわす世のために

きみをおさむるうつハものなり

草庵集楽山録
(東)

東山酒

吹風の治れる代のはななれハ

なをちりやらて君をこそまて

山川

散ぬより紅葉に浪ハうつろひて

茨木屋七兵衛

自在屋五兵衛

海老屋久左衛門

松屋卯右衛門

つたの下行うつつ山かわ

小夜波

麴屋甚三郎

小夜ふけてあしの末こす浦風に

月をもよするなみのうへかな

千音

老松

老まつのよハひをゆつれ枝かわす

いろも若木のむめのはつ花

新後撰

白菊

いつまてか老せぬ秋かかさしけん

いたくくしものしら菊の花

雛鷺

ひな鶴のよハひハ松に相生の

いつれ久しと宿にかそへん

崑山集

養老

若水ハ養老の瀧のなかれ哉

土御門家御銘

道乃へ

道のへの清水なかるゝ柳かけ

小堀屋吉兵衛

しハしとてこそ立とまりつれ

中山家御銘

山乃井

大津屋伊兵衛

朝夕にくミてこそしれ音にのミ

きゝてハやまし山乃井のミツ

八重菊

小豆屋半兵衛

いかはかりくまなき夜半の月なれや

八重さくきくの数見ゆるまで

年中行事歌合

梅姿

初春の宿のあそひのおりを見て

むめかえうたふこえもきこゆる

新統

深緑

江戸屋仁兵衛

庭の面に木高き松の深ミより

いくしほ春のいろにそめけん

新統古今

千世乃姿

朝日さすかけにも千世を三笠山

みねなるまつのみとりのミかハ

夫木

菊乃露

諸人のけふ九重にほふてふ

きくにミかける露のことの葉

続拾遺

於とは

藤屋清兵衛

夕されハ松ふくかせの音羽川

あたりもすし山の下かけ

武者小路家御銘

有明

万屋忠三郎

もみちはのちりくるミれハ長月の

有明のつきのかつら成けり

右同断

佐々枝

七十の老の坂ゆくみちとめて

なを行すゑにさ々枝をこれ

夫木

亀乃尾

松尾甚兵衛

往かへり程さへとをき子曰かな

ちよの松ひくかめの尾乃山

堀川院第三百首

う加屋

をしてるや鶉羽ふぎける昔しもや

今宵ハ千世といわひそめけん

夫木

月影

麴屋長兵衛

詠めけん雲のふるまひ空はれて

つきかけきよき玉つ嶋ひめ

夫木

千世姿

さきくさの三葉四葉に枝かハす

松の千とせハ君かまにく

玉葉

槇能葉

八文字屋武兵衛

まきの葉の滴を落る朝きりの

はれゆく山のミねの秋かせ

夫木

幾秋

秋の田に民のミつきを備ても

いくとせあまるをしねほすらん

麴屋甚四郎

すべらぎの末さかふへき印にや

木たかくそなる若松のもり

〔注〕すべらぎ||すめらぎ……天皇

本願寺御簾中御銘

初入

立田姫しくれぬさぎの初しほハ

平野屋市兵衛

なにゝそめたる峯の紅葉そ

無量光院殿右同

花 菖 蒲

谷ふかみ尋てそひく花あやめ

ちとせすくへきくすりと思へハ

右同断

霞 毒

さは姫のかすみの袖ハおほへとも

にほひもれくる梅のはるかせ

本願寺御門主御銘

羽 袖 酒

星うたふ声もさへけり乙女子か

雲のはそてにしもやをくらん

右同断

瀧 川

たき川や岩こす波もこほりして

ひとりくたくるみねのまつかせ

光照院殿御銘

若 水

君かため御手洗川を若水に

むすふやちよの始成らん

大和屋嘉兵衛

〔注〕

一、文字は原則として当用漢字を用いた。

二、酒銘及び和歌などは、原文書のをそのまま記した。(不明の場合は「そのI」参照)

三、原文書の表記が誤りであると考えられる箇所には(○カ)、不確実と思われる箇所には(カ)を記した。

四、傍注とルビは、筆者が加えた。

五、原文書は写本である。写本には誤字・脱字・くせ字が多く、かなりの問題があるのが普通である。まして、序には「左手にハ杯を持ちながら酔にまかせてしるすことしかり」とある。

六、写の不確実と思われる箇所は、

松下大三郎編

新編『国歌大観』他により検討し、正確を期した。(但し、表記は原文書のを優先した)

(やました・まさる(名城大学農学部))

(やました・みちこ)